

畝立同時施肥による秋冬ハクサイの施肥量低減技術

【背景・目的・成果】淡路地域の露地野菜生産において、肥料コスト削減や環境負荷軽減、省力化の手段として、近年、施肥機による畝立同時施肥技術が普及しつつあります。降雨の影響を受けやすく、安定した減肥が難しいハクサイの裸地栽培において検討した結果、畝立同時施肥作業による基肥の作条施肥により施肥量低減が可能となることが分かりました。

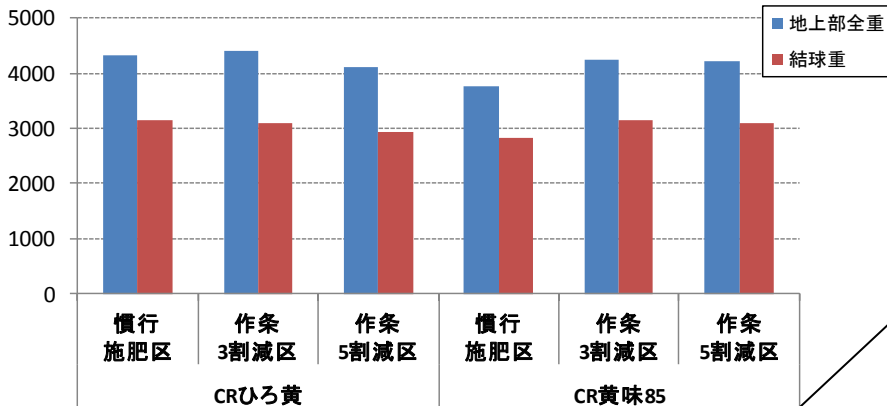
基肥の作条施肥とは？

施肥機を用い、畝立て作業と同時に、ロータリ直後から定植する2条にすじ状に肥料を投下、成型板で寄せた土を軽く覆土



基肥の作条施肥により、株元付近の肥料濃度が高くなり、定植直後からの速やかな肥料吸収により、少ない基肥量でも初期生育が促進！

このとき、IB主体の複合肥料を使用することで、濃度障害の発生は見られない



基肥施用後は、栽培カレンダーに準じ、定植20日後、40日後、60日後の3回の追肥により肥効を保つ

基肥量を30~50%減量しても、慣行施肥と同等の収量が得られ、また、トータル窒素成分で最大25%の施肥量低減が可能に！

図 ハクサイの施肥方法・施肥量の違いが収量に及ぼす影響

<耕種概要>

- 1) 播種日: 2011年9月15日(128穴セル育苗) 2) 定植日: 2011年10月3日(ひろ黄)、10月7日(黄味85) 3) 収穫調査日: 2012年1月31日
- 4) 栽植密度: 畝幅135cm × 株間43cm × 2条千鳥植え
- 5) 施肥: 基肥: スーパ-IB(18-10-9) 100kg/10a(作条3割減区、作条5割減区は基肥のみ減量)
追肥1・2回目: あわじ島化成S500(15-10-10)各40kg/10a、追肥3回目: NK化成(18-0-18)40kg/10a

【技術の活用】

1. 施肥量は、地域慣行施肥基準のトータル窒素成分37kg/10aに対し、25%減の28kg/10aに低減でき、環境負荷軽減とともに、肥料コストは28%減につながり、施肥コスト削減、作業省力化により露地野菜経営の安定に貢献できます。
2. 初期生育が優れる基肥の作条施肥技術は、秋の長雨等で予定よりも圃場準備、定植作業が遅れた場合など、生育遅れを取り戻すためのリカバリー技術としても活用が可能です。